

もくじ

はじめに	01
第1章 なぜ「連研」なのか	
●この本の必要性	02
●「連研」とは	03
●「連研」の目的	03
●門徒推進員中央教修	04
●門徒推進員とは	05
●「連研」を通して	05
●「連研」の構成	06
●だからこそ「連研」なのです	09
第2章 「連研」を始めましょう(ホップ・ステップ・ジャンプ)	
●「連研」を始めるためには (ホップ)	10
●「連研」を準備しましょう! (ステップ)	12
●「連研」を良いものにしましょう! (ジャンプ)	20
第3章 話し合い法座をすすめるために①	
●開催有無の確認	22
●会場について	23
●駐車場について	24
●受付	24
●会場内配置	25
●休憩	25
●講義概要に沿った基礎的学習の時間	26
●話し合い法座	28
●新型コロナウイルス感染症予防対策について	29
第4章 話し合い法座をすすめるために②	
●話し合い法座の目的	30
●各回の繋がりを大切に	31
●話し合い法座での僧侶の立ち位置	32
●自分も相手も守るために	33
●話し合いをしやすい雰囲気作り・おもてなし	34
●緊張を解きほぐす一言	35
●約束の共有	35
●約束があるから安心できる	36
●参加者の意見(語り・思い)を深めるために ー進行とファシリテーション、傾聴ー	37
●話し合い法座を終えた後に	43
第5章 「連研」をより充実したものにするために	
●門徒推進員中央教修のすすめ	44
●「連研」修了者へのフォローアップ	49
●「連研」スタッフとして関わる皆さんへ	51
付録・資料	54
おわりに	57

はじめに

各組・各現場において、門徒推進員養成連続研修会(「連研」)に取り組んでおられる、あるいは取り組もうとされる皆さまに、ご理解とご尽力を賜り、ご苦労いただいておりますこと、心より敬意を表します。

さて、『法座開設の手引き』が1997(平成9)年に発刊されてから、すでに20年以上が経過いたしました。

現代社会は、少子高齢化・人口減少・過疎過密などの社会(地域)構造や家族形態などが多様化し、また、経済至上主義などによる価値観の変化や、情報社会の急速な発展などの影響から、人々の意識は大きく変動し続けています。これらの社会変動によって、浄土真宗のみ教を伝えることが困難な状況になっています。

このように変動し続ける社会の中で、私たちの宗門では、「連研」を永きにわたり取り組んでまいりました。

このたび発刊いたしました『「連研」のすすめ』は、『法座開設の手引き』をもとに、従前より取り組んでまいりました「連研」の現場でのさまざまな事例を集約・整理し、現場で取り組みやすい内容をめざして編集いたしました。

例えば『法座開設の手引き』では、当時の状況のなか「僧侶は聞くことが苦手」であることが明らかになり、それを克服するために、カウンセリングの心構えである「カウンセリングマインド」が取り入れられました。さらに、本書では、カウンセリングマインドに加えて、参加者の発言を促し、話の流れを整理し、参加者の認識を確認するための技法である、「ファシリテーション」や「傾聴」が加えられています。

カウンセリングマインド、ファシリテーションや傾聴は、「連研」だけでなく、日々の法務や会議、またボランティアの場も含めた、人と接する場面に応用できる内容であると考えます。

組にはさまざまな知識や経験をお持ちの方がおられると思います。ファシリテーションや傾聴等は、教育現場や企業研修の場で取り入れられていますので、経験者もおられるかもしれません。組の役職者だけでなく、ベテランから若手まで多くの人を巻き込んで、「連研」の運営を進めてみてはいかがでしょうか。

2019(令和元)年度末から、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受け、それぞれの現場で「連研」が休止や中止となりました。また、2020(令和2)年度には門徒推進員中央教修の全日程が中止となりました。

私たちは、このようなコロナ禍や困難な状況にある時にこそ、創意工夫を凝らして、ご親教「念仏者の生き方」を実践するために、さらに強力に「連研」に取り組む必要があると思います。

2020(令和2)年3月31日には『連研ノートE(改訂版)』が発刊されました。「連研」の取り組みをすすめるために、非常に有難い限りです。そして、本書を『連研ノートE・スタッフノート』や『連研ノートE・スタッフノート(別冊)』と併用くだされば、より効果的にお取り組みいただけることと考えます。

各組・各現場において、「連研」に取り組んでおられる、あるいは取り組もうとされる方がたの、具体的な参考の一端になりますことを、心から願いたします。

2021(令和3)年3月31日
浄土真宗本願寺派 門信徒教化部
「連研」補助資料作成部会

なぜ「連研」 なのですか

この本の必要性



新たに「連研」を始めることや、休止していたものを再開することは、とてもエネルギーのいることです。スタッフ探しに始まり、募集要項の作成や参加者集め、会場の設定等々、しなければならないことがたくさんあります。また、取り組みをともにしていただきたい組内寺院においても、それぞれの思いや活動があり、全寺院から参画、協力していただくことが難しい、という実状もあると思います。そのため、なかなか「連研」を始めることができず、どうしたらよいのか悩んでおられる方も多いのではないのでしょうか。本書は、そんな皆さんの悩みが少しでも解決できることを願って作成されました。



「連研」の成り立ちや目的に始まり、実際に開催するまでに行うべきことや準備物、宗派の助成制度などについても紹介しています。また、「連研」を開始するまでだけでなく、参加される門信徒との関わり方や、カリキュラムの進め方など、現場に対応した具体的な内容も数多く紹介しています。

さらには、「連研」を修了された後にご参加いただきたい「中央教修」について、また「門徒推進員」とは教区や組、そしてお寺にとってどのような存在となり、どんな取り組みをしていただいたらよいのか、などにもふれています。

全国の「連研」に関わるスタッフ（僧侶・寺院関係者・門徒推進員など）の実体験を通して、ひとつでも多くの組で「連研」が開始されることを願い、お届けさせていただきます。

「連研」とは



浄土真宗の僧侶にとって、「れんけん」という響きは「よく聞かれるもの」であると思います。名称は「門徒推進員養成連続研修会（連研）」です。それを略して「連研」と呼んできました。

「連研」の始まりは1961（昭和36）年の親鸞聖人700回大遠忌を契機として始まった「門信徒会運動」に由来します。門信徒会運動は、形骸化した教団の状況に対する危機感から「全員聞法・全員伝道」を願いとし、自らが教えを聞き、教えに生きる門信徒・僧侶になることをめざして始めました。また門信徒会運動の取り組みの中で取り入れられた「話し合い法座」によって、それまで行われていた、講師の話を一方向的に聞くという形態から、お互いの思いを述べ合い、聞き合うことによって、それぞれの持つ苦悩を共有しようとする法座の形態が始まりました。

また、話し合い法座によって、門信徒と僧侶の宗教に対する意識や寺院や教団のあり方に対する思いの乖離も明らかになりました。

門信徒の苦悩を受け止め、現代社会の問題と向き合うためのみ教えのいただき方や僧侶の姿勢を問う営みとして、1978（昭和53）年に「連研」が開始されました。



「連研」は、浄土真宗の伝統的な教学や、作法を学ぶだけの研修ではありません。「連研」の大きな特徴のひとつである話し合い法座は、お互いの苦悩や思い、浄土真宗のみ教えを門信徒と僧侶が「ともに聞き合う場」です。

「連研」は、これからの人生を生きていくうえで支えとなるみ教えにであり、普段の生活のみならず、苦しみや困難にであったときにも依りどころとなる、「生き方の中心」が明らかになっていくのです。

そして、「連研」の主たる目的に、その名称にもある「門徒推進員」の養成があります。門徒推進員になれる方は、各組などで実施の「連研」を修了され、本願寺で行われる「中央教修」を修了されています。そして所属教区教務所長または沖縄県宗務事務所長より委嘱され、門徒推進員名簿に登録された門徒を門徒推進員と言います。1978（昭和53）年から始まった「中央教修」は、2020（令和2）年度までに270回以上開催され、門徒推進員は1万人を超えています。

「連研」の目的

門徒推進員中央教修



門徒推進員中央教修、略して「**中央教修**」は、本願寺において、毎年4～6回程度行われています。京都で行われる研修会のため、参加すること自体がなかなか難しいという方も多いかもかもしれません。それでも毎回多くの方が参加してくださるのはどんな理由があるのでしょうか。

全国各地で「連研」という同じ学びをしてきた門信徒が集う「中央教修」は、ある意味「**特別**」な時間だと思います。

年齢も出身も経験も違うけれども、同じ浄土真宗というみ教えにであり、「連研」に学び、同じテーマに向き合ってきた「仲間」とのあいごそこにはあります。「中央教修」の最終日にもなると、まるで旧知の仲のような間柄になっていきます。

「中央教修」は、各地の「連研」の学び直しというよりも、新たな仲間や気づきを多く得られる機会となっています。

そのような経験ができる「中央教修」だからこそ、多くの方がご参加くださり、受講された皆さんからの喜びが伝わっていくのではないのでしょうか。

組での「連研」を修了された皆さんには、ぜひ「中央教修」へご参加いただきたいと思います。

詳細は、第5章(P.45)へ⇒



門徒推進員とは



「中央教修」を修了された門信徒は、宗派の「門徒推進員名簿」に登録され、「**門徒推進員**」となります。

門徒推進員とは従来、僧侶とともに宗門の基幹運動(門信徒会運動・同朋運動)を積極的に推進して下さる門信徒としてきました。現在、宗門全体で取り組んでいる運動は、「御同朋の社会をめざす運動」(実践運動)と名称が変更されましたので、門徒推進員とは、僧侶とともに『御同朋の社会をめざす運動』(実践運動)を積極的に推進して下さる門信徒となります。

親鸞聖人700回大遠忌において提起された「形ばかりの僧侶、名ばかりの門徒」という言葉によって、門信徒・僧侶がともに〈浄土真宗の門徒〉としてのあり方が問われました。「浄土真宗の門徒の家に生まれたから、私は門徒です」「結婚のご縁のあった家庭が門徒だったので、私は門徒になりました」といった捉え方ではなく、自らの生き方の中心となる教えが明らかになり、その教えを依りどころにして生きる人が門信徒・僧侶であり、「**念仏者**」です。

その念仏者としての歩みの第一歩が「連研」であり、実践者が門徒推進員なのです。

詳細は、第5章(P.44)へ⇒

通して「連研」を



各組における「連研」は、おおよそ2年間(36時間)で行います。その期間を通して「門信徒と僧侶」という関係から、同じお念仏を依りどころとした念仏者としての関係が生まれてくるのも「連研」の大きな特徴です。

いわゆる「講義」のみでは、先生と生徒といった関係性が生まれがちですが、「連研」では、**門信徒と僧侶が同じ立場**で、ひとつのテーマについて真剣に向き合い、話し合います。「今まであまり関係ないと思っていたお寺や仏教を、身近に感じるようになった」「僧侶の皆さんと同じテーマで話し合うことで、お互いの意見の違いや、同じところがわかって良かった」など、他の研修会等ではあまり聞かれない感想が出てくることは、「連研」を行う大きな意義であり特徴です。